

木もれびの森保全・活用計画

令和7年10月改訂

相模原市

<目次>

1. 背景と目的	1
2. 現状と課題	2
(1) 森の植生に係る現状と課題	2
ア 現状	2
イ 課題	2
(2) 森の利用に係る現状と課題	2
ア 現状	2
イ 課題	3
3. 基本方針	3
(1) 森の保全・活用に関する基本方針	3
ア 目標植生の設定	3
イ 森の適正な樹林管理	3
ウ 森の適正利用	3
(2) 計画推進体制に関する基本方針	3
ア 管理運営体制の整備	3
イ 土地所有者との協力体制の充実	3
4. 施策の方向	3
(1) 森の保全・活用の方向	3
ア 目標植生の設定	3
イ 森の適正な樹林管理	4
ウ 森の適正利用	5
(2) 計画推進体制の方向	6
ア 管理運営体制の整備	6
イ 土地所有者との協力体制の充実	7

1 背景と目的

木もれびの森は、首都圏において、良好な自然環境を有する緑地として近郊緑地特別保全地区（※）の指定を受け保全されており、本市では、平成8年度に策定した「さがみはら みどりの基本計画」において、この森を市域における『みどりの拠点』に位置付けているところです。

こうした中で、将来にわたり、この森の自然環境を良好に保全するとともに、より有効に活用するため、平成11年度に森の現況特性や自然的・社会的条件等に係る基礎調査を実施しました。さらに、平成12年度から2か年にわたり、市民、土地所有者、専門家などで構成する「木もれびの森保全・活用計画検討会議」を設置し、基礎調査の結果を基にして森の抱える課題について、整理・検討していただき平成14年3月に木もれびの森の保全・活用の在り方等について提言を受けました。これを踏まえ、今後の木もれびの森の保全と活用の基本的な考え方と施策の方向を示すため、平成15年3月に本計画を策定しました。

その後、平成17年度から平成18年度にかけての旧津久井町、旧相模湖町、旧城山町、旧藤野町との合併を経て、平成21年度に「さがみはら みどりの基本計画」を見直し、新たに「相模原市水とみどりの基本計画」を策定しました。同計画は、平成27年3月に中間見直しを行いました。木もれびの森の『みどりの拠点』としての位置付けは継承しています。さらに、平成22年3月に策定した「相模原市景観計画」では、木もれびの森を「みどりの景観拠点」に位置付けています。

平成25年10月には、約20.1ヘクタールの県有地が本市へ無償譲渡され、市有地及び本市が土地所有者との使用貸借契約に基づいて管理している土地と合わせると、森全体の約9割を本市が一体的に管理し、有効的に活用することができるようになったことなどから、平成27年3月に「木もれびの森保全・活用計画」を改訂しました。

木もれびの森の現況としては、令和元年度以降に発生した大規模なナラ枯れ被害や樹木の高木化・老木化が進行したことにより、森林の健全性が損なわれてきています。また、近年の大型台風や豪雨などの影響から、倒木・落枝のリスクがさらに高まり、市民の安全確保が大きな課題となっています。

このような状況から、市街地に残された貴重な平地林である木もれびの森を、市民が安心して利用できる森として次世代へとつないでいくため、木もれびの森保全・活用計画」の所要の見直しを行います。

※ 首都圏近郊緑地保全法第5条の規定に基づき、近郊緑地保全区域のうち首都及びその周辺の地域の住民の健全な心身の保持及び増進又はこれらの地域における公害若しくは災害の防止の効果が著しい緑地として指定された区域

2 現状と課題

(1) 森の植生に係る現状と課題

ア 現状

木もれびの森は、かつてクヌギ、コナラ等の樹木を定期的に伐採し、薪や炭として利用するなど、いわゆる里山の雑木林としての管理がされていましたが、都市化の進展やエネルギー源の転換等により薪炭林としての利用が行われなくなりました。その結果、樹木の高木化や常緑樹化が進み、森内が暗くなったことなどによる様々な影響が出ています。

(ア) 動植物の生態系への影響

希少動植物を含む多様な動植物が確認されている木もれびの森は、広域的に見て、近隣緑地との生態系ネットワークの拠点として重要な緑地ですが、明るい環境で生育していた植物が減少するなど生態系機能の低下が見られます。

(イ) 雑木林の景観への影響

常緑樹の増加や樹木の高木化、下草の繁茂、ナラ枯れ被害による未立木地の増加等によって、かつての雑木林としての景観が損われつつあります。

(ウ) 隣接住宅地の生活環境への影響

日照や防犯上の問題などによる隣接住宅地の生活環境への影響が懸念されています。

イ 課題

木もれびの森が薪炭林として利用されなくなり、人の手が入らなくなってから久しいため、枯損木の増加等、樹木の高齢化やナラ枯れ被害に伴う様々な課題に直面しています。

今後は長期的な視点に立ち、市民が安全に安心して利用できる森を基本とし、森の植生をより適正に回復しつつ、保全・再生を一体的に推進する、計画的な樹林管理を適切に行う必要があります。

また、隣接住宅地等への影響や生態系機能の低下を防ぎ、生態系ネットワークの拠点である木もれびの森の生物多様性を保全するとともに、歴史的価値を有する雑木林の原風景の保全を図る必要があります。

(2) 森の利用に係る現状と課題

ア 現状

(ア) 林床の裸地化の進行

木もれびの森は、「相模原中央緑地（都市公園法による都市緑地）」等の一部の区域を除いて、原則として開放していませんが、散策の場や生活道として無秩序に利用されています。その結果、林床の裸地化が進行しており、林床植物の減少などがみられます。

(イ) 花壇や駐車場等の目的とは異なる利用

森の一部では、花壇や畑、駐車場等の緑地の保全管理上や景観上好ましくない、目的とは異なる利用がみられます。

(ウ) 車両通行による影響

森内の道路は、道幅が狭い上、スピードを出して走行する車が多いため、散策者の安全性の確保や、また車の排気ガス等による植生への影響が懸念されています。

イ 課題

森の利用については、散策路や面的利用区域の位置付け、利用ルールの明確化、車両通行に対する基本的な考え方の整理など、保全を基本とした森の利用方針を設定し、周知徹底を図る必要があります。

3 基本方針

本計画における基本方針は、以下のとおりとします。

(1) 森の保全・活用に関する基本方針

ア 目標植生の設定（目標とする森の姿を定めます。）

イ 森の適正な樹林管理（森の適正管理を図ります。）

ウ 森の適正利用（森の利用の適正化と有効活用を図ります。）

(2) 計画推進体制に関する基本方針

ア 管理運営体制の整備（計画実施に向けた管理運営体制の整備を図ります。）

イ 土地所有者との協力体制の充実（計画実施における土地所有者との協力体制の充実を図ります。）

4 施策の方向

(1) 森の保全・活用の方向

ア 目標植生の設定

適正な森の植生を回復し、多様な動植物の保全や生活空間との共生及び雑木

林の景観保全を図るために、あるべき森の将来像として、次に示す目標植生を設定します。

表1 目標植生と植生内容

目標植生	植生内容
落葉広葉樹林(コナラ、クヌギ等)	現在の樹林を保全・再生させた落葉広葉樹林
針広混交林(コナラ、クヌギ、ヒノキ等)	現在の樹林を保全・再生させた針広混交林
常緑広葉樹林(シラカシ等)	自然遷移に任せた常緑広葉樹林
住宅等緩衝区域	住宅等隣接地との緩衝帯としての草地や低木

イ 森の適正な樹林管理

(ア) 目標植生に基づく管理方針の設定

現況植生については、目標植生に基づき、次のとおり管理方針を設定し、計画的な樹林管理を行います。

なお、民有地については、土地所有者との合意形成を図りながら管理を進めます。

表2 目標植生に基づく管理方針

現況植生	目標植生	管理方針
・落葉広葉樹林 ・裸地化した林床	落葉広葉樹林	<ul style="list-style-type: none"> ●既存の落葉広葉樹を活かしながら高木の整理や補植を行うことで、高木・中木・低木が重なり合う樹林として管理します。 ●植樹と萌芽更新により伝統的な雑木林の再生を図ります。
・針広混交林 ・針葉樹林	針広混交林	過密な針葉樹を間伐し、広葉樹を取り入れた階層構造のある針広混交林として管理します。
常緑広葉樹林	常緑広葉樹林	原則として、人の手は入れませんが、枯損木処理のほか、必要に応じて下刈り、除伐、間伐など、最小限の管理を行います。
草地等	住宅等緩衝区域(草地、低木)	住宅等からおおむね5～10メートルの範囲を草刈り、伐採により低木や草地として管理します。

(イ) 伐採木等の循環的利用

樹林管理により発生した伐採木や剪定枝等に関しては、可能な限り循環的利用を図ることにより、環境負荷の軽減を図ります。

ウ 森の適正利用

(ア) 利用区域の設定

林床の裸地化の主因となる森内の無秩序な利用を制限するため、広場などの「面的利用区域」と散策路などの「線的使用区域」を設定します。

a 面的利用区域

面的利用区域については、林床植生に対する負担が大きいため、現状で広場等として利用している「相模原中央緑地（都市公園法による都市緑地）」・「若松憩いの場（旧県有地）」・「西大沼2丁目子ども森林公園（市子どもの広場設置要綱による施設）」・「慰霊塔（市慰霊塔設置に関する条例による施設）」とします。

なお、森内の適正かつ有効的な利用を図るに当たっては、必要に応じて面的利用区域の見直し（都市公園法による都市緑地の追加設置等）を検討します。

b 線的使用区域

線的使用区域については、森内への無秩序な侵入を防ぐため、現状の踏み分け道の利用目的、頻度等を考慮しながら設定します。

(イ) 目的とは異なる利用の抑制

住宅等緩衝区域における花壇、畑、駐車場等の目的とは異なる利用は、緑地の保全管理上や景観上好ましくないため排除に努めます。

(ウ) 車両の通行

森内の既存道路における車両の通行に関しては、植生への影響や散策者に対する安全性などを考慮して、利用制限・利用抑制を検討します。

(エ) 利用ルールの周知徹底

森の自然環境を維持するために、利用目的に応じた明確なルールを設定し、法的規制と併せ、広く市民に対して共通認識として周知徹底を図ります。

また、木もれびの森は多くの土地所有者の協力のもと市街地に残されてきた貴重な平地林であることを広く市民に対して周知し、適正な利用を促します。

(オ) 森の有効活用

自然とふれあう場としての活用や苗木の植樹活動等、市民団体・教育機関等と連携した学校教育、社会教育などの環境教育等の場や、企業の地域貢献活動の場としての利用促進を図ります。

また、樹林管理により発生する伐採木や剪定枝等について、学習教材化など有効活用の手法を検討します。

(2) 計画推進体制の方向

ア 管理運営体制の整備

(ア) ボランティア団体や地域の自治会等との協働

ボランティア団体や地域の自治会、森づくりに参加意欲のある市民等と本市が協働するとともに、人材確保や技術向上に対する支援を行い、本計画に基づいて、市民参加型の維持管理を促進します。

- a 森づくりパートナーシップ推進事業及び街美化アダプト制度の活用
- b ボランティア団体や地域の自治会等の活動情報の共有化や、関係者をつなぐ場の構築
- c 市民講座等、ボランティアの技術向上や新たなボランティアの確保・育成に資する事業の実施
- d ボランティア団体や地域の自治会と連携したみどりに関するアドバイスや森の保全・活用に関するルール等の周知徹底

(イ) モニタリング調査による適切な樹林管理

自然の回復力や遷移の方向など、森の潜在的な可能性は、その土地や場所、立地環境等によって様々であることから、本計画で設定した管理方針に基づく樹林管理を行っていても、森の状況は変化することがあります。

そのため、モニタリング調査による森内環境の検証を行い、必要に応じて検証結果を日頃の保全活動に反映し、適切な樹林管理の推進を図ります。

なお、木もれびの森を将来にわたり保全・活用していくため、必要に応じて本計画の見直しを図りながら、適切な樹林管理に取り組んでいくこととします。

モニタリング調査の内容例

- ・ 指標種調査
- ・ 散策路整備による林床の回復状況調査

イ 土地所有者との協力体制の充実

(ア) 土地所有者との情報交換の充実

土地所有者への情報提供や意見交換のための場の構築など、情報交換や相互協力体制の充実を図ります。

(イ) 樹林管理における土地所有者への支援の充実

樹林管理における土地所有者への支援を充実するために、ボランティア団体の活用等を図りながら、相互に協力して樹林管理を推進します。